〔朝鮮の美術展によせて〕

李　朝　の　花　鳥　画

花鳥画とは言うまでもなく花と鳥を主題にした絵画ですが、広義には草木、虫、獣なども含めて解釈するようです。中国では花鳥画は六朝時代に始まり、唐代に盛んになりましたが、一つの独立した画題となったのは五代に入ってからだと言われています。

韓国の花鳥画は中国の唐代以後、その影響下で始められたと推察されますが、残念ながら三国時代や統一新羅時代、10世紀初頭までの古代、及び中世にあたる高麗時代（912～1392）の遺品はいずれも現在のところまったく確認されておりません。もちろん『三国史記』や『三国遺事』などの書物には花や鳥にまつわる記録や説話などが収録され、また詩歌などにはそれらが抒情的に取り上げられておりますし、工芸品にも花鳥は装飾意匠の一部として表わされていますから、花や鳥は当然のことながら当時の人々に強く意識されていたことに相違ありません。

高麗時代は仏教美術が中心ですが、絵画に関しては、仏教絵画以外にも宮中の絵所である図画院を中心にすぐれた鑑賞的絵画が盛んに制作されたようです。例えば同代の画家としては中国の北宋時代の花鳥画の名手としても名高い徽宗皇帝がそのすぐれた画技を賞賛したという李寧のような名家もおりますが、当時の画家達についての限られた文献から窺ってみても、同代には少なくとも花鳥が一つの独立した主題になっていたとは考えられません。例えば、李寧の作品名がいくつか文献で知られていますが、それらはほとんどが山水画の範疇に入るものです。

それでは、次の李朝時代はどうだったのでしょう。李朝初期に中国絵画を本格的に蒐集した人物に李朝第四代王、世宗の第三王子の安平大君、李瑢がおります。この安平大君は1445年迄に222軸もの書画を蒐めていますが、その中には彼が重用した李朝の画員、安堅の作品が30点、例外的に含まれています。それらの作品の主題はほとんどが山水画で、わずかに「起粟生花図」一幅、「墨梅竹図」一幅、「芦雁図」一幅、「花木図」一幅、「長松図」一幅などが見られるに過ぎません。ですから李朝初期に活躍した韓国の代表的な画家、安堅も、高麗時代の李寧と同じく花鳥画をあまり描いていないことが判ります。

さらに李朝時代の芸苑の絵画事情を探るために宮中の絵所、図画署の画員を採用するための試験「取才」を、第九代成宗（在位1469～1494）時に完成した『経国大典』にみてみますと、その実技の試験課題には、①竹画、②山水画、③人物・翎毛画、④花草画の4種があり、この中から2科目を選択させています。評価は①竹画の「通」（巧みなもの）は5分、「略」（普通のもの）は4分、②山水画の「通」は4分、「略」は3分、③人物・翎毛画の「通」は3分、「略」は2分、④花草画の「通」は2分、「略」は1分と定められております。竹を巧みに描けば一番高い点数の5分を得ますが、花草は巧みでも2分しかもらえません。このような規定は物の形状をありのままに表わそうとする写実性よりも、精神性を第一に表現しようとする写意性を重んじる文人画的発想から生じたものです。ですから翎毛・花草のような吉祥的意味をもつ、いわば装飾的実用画は職人的な画工の制作対象とされて、軽視されていたと言えます。

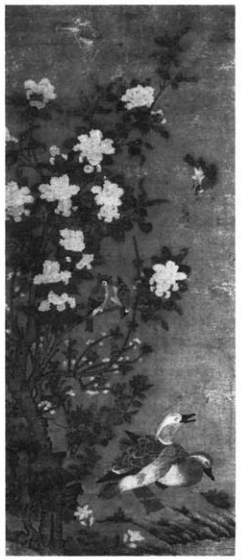
しかし、単に花草の表現についてのみ見れば、歳寒三友、四君子、あるいはその他の花木に優れた作品を残した画家はたくさんおります。竹では秀文、李霆、梅では魚夢竜、蘭では金正喜、李昱応、菊では申師任堂、姜世晃などが挙げられます。四君子の内では特に竹と梅が多く描かれており、李朝初期の墨竹、墨梅の作例が残っています。それに比べて菊と蘭はその遺品も菊は16世紀前半、蘭は17世紀前半というように時代が下り、竹や梅に遅れて発達したように思われます。

歳寒三友や四君子と共に花木で、水墨画の主題として好まれたものには葡萄、牡丹、芭蕉などがあります。墨葡萄の名手としては黄執中、李継祐、崔奭煥などが知られています。牡丹は韓国でも古くから富貴図として豊麗な着色画に描かれ、その屏風はもっぱら婚礼の場で用いられていたようです。牡丹図の古いものでは李朝中期と思われるものが残っていますが、文人好みの墨牡丹として登場するのは李朝後期に入ってからだと考えられます。なお、これらの花木に鳥を組み合わせたものが種々ありますが、それらの中では竹に雀、梅に鶯、梅に鵲などが多く、珍しいものでは柳に鶯なども見られます。梅に鵲は韓国特有の画題と言えますが、彼地では古来、家の庭

花鳥図 李朝時代中期 大和文華館蔵

花鳥図 李朝時代中期 大倉集古館蔵

花鳥図　李朝時代中期



花鳥図　李朝時代中期

木に鵲が飛んで来て鳴くと、これは遠くに旅立った身内の者が近々無事に帰ってくる吉兆だとして喜ぶ俗信があることに由来するものです。鵲の画では17世紀の士人画家、趙涑がよく知られています。その他、翎毛では、鴨、雁、鷺、あるいは猛禽類の鷹、鷲なども見られ、この種の画では李朝後・末期の沈師正、鄭弘来、張承業、楊基薫などが有名です。

なお、これまで取り上げた花草、翎毛などの作品は主として文人画家によるもので、それらは水墨画、または淡彩画です。それらの中には中国・明代画院の代表的な写意派の花鳥画家である林良の作風に類似したものが見られます。例えば李朝後期、18世紀の名家、金弘道の花鳥画などに「林良の筆に倣う」という賛文のあるものが散見されますので、林良は当時ソウル画壇ではかなり名の知られた画家であったと思われます。

ところで林良風の花鳥画といえばこれは中国で言う徐氏体の作品です。徐氏体は言うまでもありませんが、五代、南唐の徐熙が始め、孫の徐崇嗣によって成立した水墨画と没骨画法による花鳥画の一様式で、瀟洒な野逸さに特色があります。この徐氏体は同じく五代、蜀の黄筌と子の黄居寀によって完成された黄氏体と並べて中国花鳥画の二大様式、あるいは二大典型と称されています。黄氏体は鉤勒塡彩法を用いて華麗な富貴さに特色があります。李朝ではこの黄氏体の花鳥画も初期から制作されていたようで、李朝中期頃と思われる作例も何点か伝えられています。挿図に示した作品がそうですが、これらの作風は徐黄を折衷し、さらに写実を重視した宋代院体画を標榜した明代画院の呂紀などの画風につながるものといえます。これらの装飾的な花鳥画は四季花鳥画としての様式を確立して発展しました。遺品からみても中期から後期へと継続して図画署などで制作されたようですが、民間においても盛んに描かれました。それらは民画などと呼ばれ、日本でもよく知られ、愛好されてきました。それを連続させて屏風に仕立てた花鳥図屏風は新婚夫婦や婦人の部屋に飾られましたが、富貴寿福、夫婦和合を象徴して、各扇に花と岩を背景にして雌雄一対の鳥を描くのが通例です。民画と通称される花鳥画は、韓国では貴賤を問わず様々な生活の場で使用される実用的な絵画として、李朝末期に至るまで永々として制作されました。

李朝の花鳥画は文人、士大夫による徐氏体の鑑賞画としての花鳥画と、専門画工による黄氏体の実用画としての花鳥画に二分できるかもしれません。それは李朝人が徐氏体の花鳥画と黄氏体のそれの作風上の差異をことさら明確に区別して、各々に役割分担をさせてきたせいかもしれません。

（吉田宏志）

季刊 美のたより №102
平成5年2月25日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.